

## 午前十時のぬけがけ

午前十時。窓から差し込む柔らかな日差しが、春の訪れを告げていた。最高気温は今年初の二十度に達する予報で、吹き込む風も湿った土の匂いも、あらゆるものが新鮮に感じられる。ただ一点、ここ、取調室の古ぼけた備品を除いては。

眞坂伊一郎は捜査に行きづまるとよく一人で取調室に閉じこもり、頭の整理と称して紫煙を燻らせる。被疑者のいない取調室は妙にシンとしていて、無機質な机、ガムテープで補修されたパイプ椅子、こびりつくようなタバコの臭いさえも、眞坂にとっては心地よかった。

ほかの官庁の例にもれず、T警察でも春の人事の発表を来週に控えていた。眞坂が高卒警官として交番勤務からキャリアをスタートさせてから来年で二十四年になる。地域課から警官の花形ともいえる刑事課に抜擢されたのが八年前。柔道で鍛えた筋力とスタミナが持ち味で、凶悪な現行犯を力でねじ伏せた経験も数えきれない。しかし昨今は若い刑事に比べると直体力の衰えを意識せずにはいられなかった。先日にも逃走する窃盗犯を追う際に足がもつれ、転倒してひどい擦り傷を負ったばかりだ。来年も刑事課にいられるかどうかは定かでない。眞坂は自分の体に向かって語り掛ける。――刑事課を去るということは、長年追ってきたこのヤマを自分の手で解決できないということだ。

「眞坂さん、またここにいたんですか。探しましたよ。」

取調室のドアを開けて入ってきたのは部下の神林だ。人の思いを知ってか知らずか、遠慮なく人の空間に踏み入るこの部下を眞坂は存外気に入っている。

「捜査会議の時間だったな、すぐ行く。」

「ゆっくりしている場合じゃないんですから。急いでくださいね。」

そう言って神林は足早に去っていく。

“ ゆっくりしている場合じゃない ”、か。眞坂が追っているヤマはあと三か月で時効を迎えようとしている。二十五年前、毒を使った殺人が行われた。使われた毒は農薬や殺虫剤としても使われる有機リン系の化合物。それ自体はさして珍しい事件でもない。警察が注目しているのは、これが“ 警官殺し ”だからだ。被害にあったのはT警察署の警部補で名を堀田といった。堀田はある土曜日の朝、病院の待合室でペットボトル飲料を口にした際含まれていた毒で命を落とした。なぜ持病もない堀田が妻には仕事にでると嘘をつき病院にいたのか、誰が毒を混入させたのか、長い年月が経った今も真相は闇の中である。

――俺が刑事課を去るのが先か、時効が来るの先か。